



第118号
 発行所 上高井教育会
 発行人 上高井教育会長 夫
 編集人 堀内文委員 長幸
 編集人 会報編集委員 和
 印刷所 西須坂新聞社

教師として ありつづけるために

太田 芳夫

児童・生徒は能力的にも性格的にも多様であり、学校をとりまく地域の人々、父母の考え方もさまざまで同質ではない。そしてまた、教育にかかわる教師の考え方や教育課題もそれぞれに異なっている。しかし、学校という組織体としての機能達成を企図したとき、そこでは共通した教育観、思考性、方向性が要求されている。

それには、個人的には多種多様な教育観は認められても、児童・生徒に対するに当たっては教師・父母・地域が同一思考に支えられた教育的共通理念に立っておらないと、学校としての教育成果を十分にあげ得ることができないからである。

こうしたなかで特に大切なことは、教育としての課題解決への歩みが、学校をとりまく人々の願いを結集した姿において、教育活動の実践の場

において具現されなければならないことである。加えて教師は、仲間集団は勿論のことすべての児童・生徒・父母・地域の人々からその存在価値が認められ、信頼され得る教師として立っていかねばならないのである。教育の場では、安易な妥協や無目的の追従は許されない。

そうなるためには、教師は教育の場の随所において主となり得られる素養と学力を身につけるための学びを己自身に課せねばならない。教師は教育の場の随所において主となり得られる素養と学力を身につけるための学びを己自身に課せねばならない。

人の意欲が成功を生み出すものではなく、成功が意欲を生み出すもので、児童・生徒の学習志向意欲も自然に出てくるものでなく、学習の内容がよくわかり、よくできることを持ちたいものである。

とは言っても、児童・生徒の能力、性格は一樣でなく多様であってみれば、指導の対応もまた複線的試案が希求されてくるが、言うほどに易なものではない。

この点についてキヤロルは「教授活動の種類や質および学習時間の量が、各学習者の特徴や要求に合わせて適切なものとされているならば、学習者の大多数がその教科の内容の完全な習得をするものと考える」と言っている。

この説は、学習過程について二つの重要な意味を示唆している。その一つは、学習時間が個々の児童・生徒が必要とするだけ十分に与えられれば、内容を完全に習得することが可能であるということ。二つには、指導がそれぞれの児童生徒の要求や特徴にマッチしていれば、すべての児童・生徒は教科の内容を習得することができるといえる。

＝上高井教育会だより＝

- 1・10 第39回信教女教師研究大会(松本市)
- ・20 教科研究世話係・委員長会(3)
- ・27 同好会世話係・会長(3)
- 2・7 第8回常任委員会
- ・12 第9回代議員会
- ・20 上高井教育会報第118号発行
- ・21 第9回常任委員会
- 3・3 第10回代議員会
- ・16 上高井教育会誌第43号発刊

郷土の文化財 ⑦⑦

氏神様の幟 (健御名方神社)

須坂市高橋町にある健御名方神社の秋祭り(十月一日、二日)に掲揚される幟である。十五年に須坂藩の書道師範で従来掲揚されていた場所が電線通過のため掲揚不能となり二回程場所を変更、現在は裏高橋と森田地区に一本ずつ離れて掲揚している。幟は長さ十・九〇尺、幅一・〇六尺、(土屋)

稜威炬共鎮郷閣 明治十五年 歳第二月

嘉穀豊穰樂有季 北村方義 揮書。ロ

本年度の実践をふりかえって

…… 本年度もあとわずかで終わろうとしています。各校では、一年間の教育
 …… 実践をふりかえり、反省、まとめの時期をむかえておられることによ
 …… う。ここに4名の先生方に貴重な教育研究をお寄せいただきました。と
 …… もども味わいながらこの一年間を省みたいものです。

おにぎりづくりを通して

百瀬 美千代

本年度、上高井教育会、技
術・家庭科学研究委員会では、
「一人ひとりを生かす題材の
選定と指導のあり方」という
テーマで、授業分析を通して
研究を進めている。そこで、
次のような「おにぎりづくり」
という題材を設定し、実践し
てみた。

① 吸水した方がよい。
② 水の量が大切なのではな
いか。
③ むらす時間も大切なので
はないか。
という意見がだされ、一つ一
つ、実験実習を通して解決し
ていった。

家庭での体験が少ない子ど
もたちにとって、実際に食べ
比べてみることによって、そ
の違いに一人ひとりが納得す
ることができたようだ。
炊飯実習をおにぎりづくり
と結びつけて行なったことは
意欲がわいたこと、また、家
庭でも手軽に実行できるとい
う良い面もあったが、おにぎ
りを作りながらの炊飯の追究
には、無理もあったようだ。
おいしいごはんづくりの発展
として、おにぎり作りを考え
ていった方が、子どもたちの
意識の流れが自然になったか
もしれない。(森上小)

青少年赤十字活動

宮 啓 正 雄

本校級の子どもたちは、六
年生、最上級生になって、他
学年の見本になるようなりつ
ばな六年生、やさしい六年生
になりたいという願いを各々
が持っていた。しかし、今ま
で他の学級や低学年とのかか
わりが少なかったせい、仲
よくしたい、話をしたいとい
う気持ちはあっても、どうや
ってよいのかわからないとい
うようである。本校で本年度
から行なうようになった姉妹
学級集会でも一年生をリード
できず、困ってただウロウロ
している子が多かった。なん
とか、この子どもたちに一年
生とふれ合う機会を多くして
やりたいと思っていた。

学校目標具現化の機能とし
て、青少年赤十字活動を積極
的にとり入れ、実践を進めて
きたことの発表年であった。
実践計画に基づき、校内各
機関を通して実現をはかって
きた大きな方向は次のよう
である。

実践
集会的な活動(登録式、ト
レセン報告会、映画による
学習会など六回) 姉妹学級
交流会、全校V S タイムの
設定、旬間活動(年三回)、
学校行事へのかかわり、登
校別V S 活動、委員会別
V S 活動等々。

☆ クリーン活動等に見えるこ
とは、初めは活動の根拠もし
つかりしなかったのが、活動
を重ね、学習を重ね、集会で
たしかめ合うことに自信をつ
け、ワッペンを胸につけ、大
きな気持ちで実践することが
できるようになってきたこと
である。これには、教師の支
え、賞讃が必要であることは
当然であるが。

☆ 活動の多くは、単独活動で
はなく、学年に広がり、全
校につながっていくこと、ま
た、一つクリーン活動をする
にしても他の活動、学習と結
びついていること、関連した
活動であることを知ってきた
ことである。
☆ 地域の人たち、とりわけ年
老いた人たちの学校への協力
は特筆すべきものがある。長
い間生きてきた人生哲学と
も言おうか、小さな子どもた
ちの呼びかけに一つ一つ返事
をしてくれ、子どもたちは、
この交流からどれだけ大切な
ものを教えられたか知れない。
☆ そして、こうしたことから
活動の根っこに人を思う心、
人の存在、生命の尊厳存在が
あることに気づき始めている
ことである。
願わくば、積み重ねてきた
活動が、息長く続き、後輩に
伝えられ、社会人になっても
職場の中で、この精神を持ち
続け、何等かの実践となって
表われてほしいものである。
また、家庭にあつては、父
母から子へと、実践の中でそ
の心が伝えられていくことを
願うものである。
最後に、子どもたちのこう
した姿から、地域の人たちの
姿から、強く教えられたのが
われわれ教師である。教師が
常に実践の中にあつてこそ、
精神は生き続けていくもので
あろう。(旭ヶ丘小)

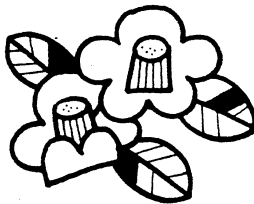


五月、姉妹学級でどんなこ
とをやったらよいか、学級会
で話し合ったところ、おにぎ
りを作って遊びにいくという
ことになった。そのおにぎ
りも自分たちの手で作って
みようということになり、おに

(1) 学年・学級単位での実践
個々の発想・実行を基本に
おきながら、・クリーン活
動・一円玉、切手集め・か
らだづくり、交流活動・ア
ルバム作り、動植物とのか
かわり等をハンドブック学
習と結びつけながら行った。
(2) 児童会の呼びかけによる実

(3) 対外的なかかわりをもった
活動。
(4) 校内重点活動に基づいた学
習活動。
これらの活動を通して子ど
もたちが身につけてきたもの
をあげてみると次のようであ
る。

☆ 活動の多くは、単独活動で
はなく、学年に広がり、全
校につながっていくこと、ま
た、一つクリーン活動をする
にしても他の活動、学習と結
びついていること、関連した



部活動の指導を通して

浦野善之

私が部活動の指導を始めてから三年が過ぎようとしています。幸運にも、私自身がプレイヤーとして実際にやってきたバスケットボール部を担当することができました。ここでは、本年度の実践というよりも、むしろ三年間の部活動での私自身を振り返ってみたいと思います。

私の中学校時代はといえばなかなか顧問の先生に恵まれず(少し失礼ですが)練習は自分たちで、ない知恵を絞ったり、先輩達の活動の真似事や、雑誌からの知識をもとに自分達なりに組み立ててやっていた。です。ですから技能の上達というのはなかなか望まれません。部活動を指導していく上では、何と云っても技能の向上、早い話が「勝つ」ことが最重要点だと思います。私はまずそれを目標に、生徒もそれを意識してやってきました。

次に時間のことで。開始終了の時刻を守ることです。私は、一回の練習で二時間半以上はやらないという方針です。一日通して行う場合でも、午前、午後のそれぞれに途中休憩を入れて二時間半です。とにかく時間内に片付けの清掃を終わらせるように心がけています。しかし実状はというと、朝の練習に二、三名は一、二分遅れてきます。

また、終わってもすぐに帰ることがなかなかできません。少しずつ自主的に守ろうとする意識は出てきていますが。三つめは意識の問題です。「部活はできる」という人間ではなく、「部活もできる」人間になってほしいということ。しかし逆に、部活さえできないのでは困ったものです。生徒会、各教科の学習があつて、部活があるということ。これを常に口に出して言っているつもりです。

四つめは、やはり私は十数年プレーをしてきたのですから、新しい技能(練習内容や方法)の提供者として常に情報を生徒に送ることが役目だと思つています。またできる限りそうしてきたつもりです。さらに、予算面でたいへんですが数多くの練習試合をこなすことも重要なものと考えています。

最近、地域素材の教材化ということが叫ばれ、各校においてもそれぞれその地域に根ざす素材を探り上げ、研究を重ねた上で教材として組み入れた。クラブ活動やゆとり時間の中で児童と共に究明を図ったりしている試みが多いが、取り組んでいく児童の側の追究の意欲はどのようにしたら燃え続けさせることができ、また長く生活の中に生かされていくようになるかが大きな課題と考えられる。

本校においては、昭和五十六年八月に当該地域を襲い、死者十名重軽傷者十六名を出した仁礼災害を教材として採り上げ、災害の苦しみと悲しみを繰り返さずこのないようという願いから、四年の単元「健康で安全な暮らし」の中にこの仁礼災害を位置づけ研究授業を実施して深めてきているが、四年余の年月を経ると児童の側は災害といつて

も直接的には幼児の頃のおぼろげな記憶のみとなり、災害現場は当時立ち入り禁止となつていたので、復旧後の現場のみしか知らない世代の子どものみとして育ってきている。このために、家庭共々、仁礼災害について話し合つてもらうために、「仁礼災害はもう一度、襲ってくるだろうか」という課題をかがけてアンケートを実施した。

この結果、子どもたちの三分の二までが「災害はもう一度やってくるかも知れない」ということが家庭の中での話し合いに出てきたと報告した。…では仁礼災害といふのはどれくらいの大さきだったのだろうか。原因はなんだろう

地域教材の学習の中から

松野隆

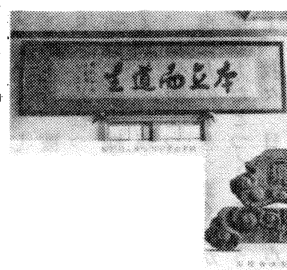
「学校づくり」(14)

「本立学校」の精神を今に

須坂小学校

明治維新まで須坂村中町にあった藩立教育所立誠館が、本校の前身である。明治六年に日滝村と合併して一小学校を組織し、本立小学校と称した。「本立」は、論語の「本立而道生」からとつたものである。

今、本校教育の基本目標は「豊かな知性とたくましいからだをもち、自主的実践力のある心の広い子どもになる」と定められている。二十一世



たいて、無理にしようとして上段にかけ上ったんだよ。」

現地学習の前に、クラスでこの話の発表に出合った時、子ども達は一様に笑いころげたが、現地へ出かけ、そのお宅の門前に立った時、笑う者はいなかった。そのお宅のたが、ずまいが如何にも執念をかけても残したいというものさしにふさわしいものであったからである。

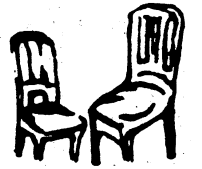
「…災害は二度ときてはならないのだ。災害はきてはならないのだ。」

現地学習で、災害で家族をなくされたおとしりのおうちへ寄り、お話を聞きながら、現場を案内され、遺体を安置したところのある公会堂の前で、子ども達との別れがわにつぶやかれたこのことばは、深く心の中に焼きつき、この学習の大切さを実感したものであった。(仁礼小)

それは、例えば学校裁量の時間等を活用して行う「くぬぎ学習」であり、「かんだ山祭り」であり、「学習発表会」や交通安全教室である。そして、それらを支える日々の教科の学習である。

よい実践によってよい子どもを育てるために、全職員が「開かれた学習」「交流教育」「総合的学習」「交流教育」のいずれかの班に属し、授業研究を中心に研鑽を重ねていく。先輩たちの求めた道を求めつつ、手探りの実践を続けている毎日である。(宮本経祥)

火鉢



比較の中でしか幸せって ないのでしょうか

玉井義郎

「村の鎮守の神様の、今日
はめでたいお祭り、ドンドン
ヒヤラドンヒヤラ、ドン
ドンヒヤラ、ドンヒヤラ、
朝から聞こえる笛たいこ」
祭ばやしにあわせて、
「ワッショイワッショイ」と子

ども(五年
生)みこし
の入場。勤
労感謝の日
を明日にひ
かえた十一
月二十二日
(土)井上
小学校収獲
祭のまくあ
けである。
よくはれ
た朝である。
職員玄関か
ら児童昇降
口にかけて
十三個のか
まどが据え
付けられ、
せいろから
は、すでに
湯気が立ち
はじめている。各学級数名の
PTA役員の方々は、まるで
競争でもしているかのような
エプロン姿のかがいしさで
立ち働いている。
おみこしのにぎわいがおさ
まった頃、体育館では、代表

収獲祭

黒岩次代

校長先生やPTA会長さん
からも、働くことの尊さや、一
生懸命働いて流した汗の気持
ちよさについてお話が合った。
おみこしが会場から去った
あとは、全員が屋外に出た。
お母さんがたはもうお待ちか
ねで、早速おもちつきがはじ
まる。つき手も、あえどりも
一人ずつ、学年相応にお母さん
がたの手を借り、だんだん
につきあがる。あっちからも
こっちからも歓声があがる。
いよいよまるめる段取りだ。
あんこもちにきなこもち、そ
してごまのおもちと手際よく
まるめられていく。
収獲祭も、いよいよ会場を
教室に移し、学級独自の趣向
をこらした中で、つきあげら
れたおもちをほおばった。エ
ノキの豆腐汁とつけ物を味わ
いながら、収獲のよろこびを
かみしめた一時であった。
(井上小)

この頃、ある建築会社の人
と話す機会があった。世の中
不景気になっても面白いもの
で家の新築など、必ず、隣の
家のより良く造ってくれて
言うのだそう。隣が杉なら
檜。四寸角なら五寸。六畳の
部屋二つなら八畳と六畳に
……といった具合で、例えば
それを逆手にとって施主をく
すぐれば商談は大体成立する
というのだ。そして、人とい
うものは、他人と比較してし
か「幸福」っていうのは味わ
えないのかも知れないと、ポ

ツリと言った。
そう言えば、ひとところ流行
?したピアノ購入などでも、
同じようなことがあったそう
で、「隣の家の〇〇社のだか
こちらで△△社のなら……」
とか、鍵盤の数の多さ、値段
を他家のと比べて云々すれば
やはり商談が成り立ったそう
である。そしてやはり、隣の
人やとにかく自分を他と比べ
て、「ホッとするんですよ。」
と言った。
私たちは毎日、それぞれ、
その人なりに生きているんだ
と聞いた。

メダカ

佐藤寿美代

教室の水槽の中で体長一
五センチほどに成長した子メダカ
がゆっくり泳いでいる。水温が
低い冬は動きこそすくないが、
卵からかえった頃と比べてよ
くここまで大きくなったもの
だとしみじみ見つけてしまつ
た。
夏の初め、理科の教科書に
メダカを見つけた子ども達は
「千曲にメダカをとりに行く
う」と言った。河原の水たまり
にいったらいいと言つた。他
の先生から「千曲にはいない
らしい」と聞いてはいないが、
もしかしらたという思いも
あって、出かけて行った。
日の当たる澄んだ水たまり
の中に黒く小さいものが見え

ろうけれども、ひよつとして
「自分は幸せだ」と思う時、
この二人の人が言ったように
他人と比較してしか「幸福」
というものを感ずることがで
きないのかもしれない。
この正月、被差別部落出身
のSさんとじっくり、「差別」
について話す機会を得た。S
さん曰く、「残念だけど、こ
の、身分制度っていうのは、
本当に人の心をうまくつかん
だやり方だ」とつくづく思うん
だよ。我々、日本人の弱点を
うまくついているじゃないか。
「幸せ」っていうのを人と比
べてしか味わうことのできな
い、おれたちの心理をうまく
ついているじゃねえか。「何
か、いやにしんみりして言っ
ただけに「差別」といったもの
戻った子ども達も、捕えた魚
がメダカではないことを知っ
てやや残念そうであった。
今はもう、メダカは自然には
生息しなくなってしまったの
だろうか。この話を聞いた父
が「日本手ぬぐいを広げて水
面にサッと入れてそっと持ち
上げるとメダカがとれた」と
いう思い出を話してくれた。
そんな川が今でもあればいい
のにとうらやましく思った。
メダカの観察は、ヒメダカ
を購入して行うことにした。
金魚屋を回ったり、広告にメ
ダカ安売りと出ている店へ同
学年の先生が行って下さった
りした。金魚屋の一匹五十円
のもの、ホームセンターの一
匹二十円のもの、合わせて二
十匹ほどが水槽に入れられた。

の裏返し「幸せ」というか
少なくとも「差別」というも
のが、我々日本人の「幸福感」
と非常に深いところで結びつ
いているように思えて、少々
情なくなってきた。何だか、
学校教育の枠の中だけでも、
絶対的幸福っていうようなも
のを考えたいと思う。我々の
社会にも随分と差別と偏見が
あるように感じられる。
(高山中)
ホテアオイも入れた。しか
し二十円のヒメダカは日が経
つにつれ次々と死んでいった。
無理な大量生産をして育てら
れたせいだろうか。水槽を眺
めながらため息をつく日が続
いた。しかしついに七月半ば
のある朝、ホテアオイの根
にいくつもの透明な卵が付い
て居るのを見つけた。「やっ
たー卵が産まれた。」水槽に
顔をくっつけてみんなで喜び
あったのである。(豊洲小)

編集後記

雪の少ない年ではありまし
が、春の訪れにはまだ時間が
かかりそうです。
本年度最終号の会報118号を
「教育会活動の総括」と「実
践をふりかえって」のテーマ
で編集し、お届けすることが
できました。
本年度のまとめを大切に、
新たに展望をもって新年度を
迎えたいものです。
学年末でお忙しいところ快
く原稿をお寄せいただいた先
生方にお礼を申し上げます。
(土屋・業田)